

## 異文化間コミュニケーションにおける topic-shift —何がミスコミュニケーションを引き起すのか—

大谷 麻美  
(奈良大学)

### 0. はじめに

一般に、コミュニケーションの主な機能として、情報内容の伝達 (transactional) の機能と対人関係の表出 (interactional) の機能を挙げることが出来る (Brown & Yule 1983)<sup>1</sup>。異なる言語文化を持つ話者の間で行われるコミュニケーションでは、同じ言語文化を共有する話者の間でのそれ以上に、その双方の機能において誤解を生じる可能性が高い。本研究は、日本語と英語の母語話者の間の会話で topic-shift の行い方がどのように解釈され、その結果、なぜ、どのようにして対人関係に関してミスコミュニケーションを生じるのかを分析する。その上で、今後の日本の英語教育において何が必要かを考察する。

### 1. 異文化間コミュニケーションで生じるミスコミュニケーション

異なる言語文化を持つ人々が何らかの共通言語を用いてコミュニケーションを行う場合、そのコミュニケーションを通じて伝えようとする内容に関してさまざまな誤解が生じがちである。このような誤解の要因の1つには、当然ながら、話者の母語とその共通言語との間に存在する韻律、語彙、文法などの言語構造そのものの違いをあげることが出来る。しかし、それに加え、異なる言語文化間でのコミュニケーションスタイルの相違が誤解を招くことも指摘されている。どのようなコミュニケーションスタイルを取ることがのぞましいのかは、言語文化により大きく異なるからである (e.g. Wierzbicka 1991; Clyne 1994; FitzGerald 2003)。また、母語以外の言語を習得する際、学習言語のコミュニケーションスタイルを習得することは、韻律、語彙、文法の習得以上に非常に困難であることもすでに指摘されている (e.g. Tannen 1984; 村田 & 大谷 2006)。

しかし、異なる言語間での韻律、語彙、文法構造などの相違は、異文化間コミュニケーションでのミスコミュニケーションの要因として一般に広く認知され、またその誤りも比較的寛容に受け止められる傾向がある。それに対し、コミュニケーションスタイルの相違は一般には理解されにくく、それが原因でミスコミュニケーションが生じてても、その要因として相手の人間性、能力、属性などが非難されがちであることが指摘されている (e.g. FitzGerald 2003; 重光 & 大谷 2003)。

### 2. 本研究の目的

近年、異なる言語文化間でのコミュニケーションスタイルの多様性について様々な研究が行われつつある。しかし、コミュニケーションスタイルの違いからどのようにミスコミュニケーションが生じるのか、あるいはそれがどのように回避され得るのかという具体的な過程に関しては、特に日本語との関連ではこれまで明らかにされていない。本研究は、この点に関して、コミュニケーションスタイルの中でも話題の提供・転換 (以下 topic-

shift とする) の方法に焦点をあてて分析を行う。

Topic-shift は、あいづちや笑いなどの他のコミュニケーションスタイルとは異なり、会話の流れの中での音声の特徴や体の動きなどの明示的な目印が少なく、そのため話者の間でも特に意識されにくいコミュニケーションスタイルの1つといえる。その結果、このスタイルの違いからミスコミュニケーションが生じて、話者はその原因に気づきにくい。

しかし、topic-shift のスタイルを異なる言語間で対照・分析し、そこでどのようなミスコミュニケーションが生じるのかを明らかにした研究はこれまで多くはない。日・英語間での対照に関しては、後述するメイナード(1993)が、Reichman(1978)の先行研究を援用しながら両言語話者の topic-shift のストラテジーを記述している。しかし、単に記述にとどまり、量的な傾向等は示されていない。Yamada(1997)は、ビジネスミーティングの会話を分析し、アメリカ人と比べ日本人が topic-shift に沈黙を多用することを指摘している。近藤(2004)は外国人とのビジネスミーティングでの日本人の会話に焦点をあて、日本人の topic-shift のシグナルが明示的ではないために外国人にはそれが理解しづらい点を指摘している。いずれの研究も、topic-shift スタイルの傾向の記述にとどまり、その背後にある各言語話者の意図、相手言語話者が受ける印象、そこから生じるミスコミュニケーションの有無などについては、未だ明らかになっていない。

そこで本研究は、topic-shift に焦点を当てて、異文化間のコミュニケーションにおいてどのようにミスコミュニケーションが生じるのか、あるいはそれがどのように回避されているのかを明らかにする。その上で、異文化間で誤解のない対人関係を築くコミュニケーションのためには何が重要なのか、特に今後英語教育で何が求められるべきかを考察する。具体的には、以下の4点の分析と考察を行う。

1. 日本語、英語を母語とする話者の中での topic-shift のスタイル(頻度、ストラテジー)の相違の分析。
2. その相違の背後にある話し手の意識と、聞き手に与える印象の分析。
3. 以上の点より、異文化間コミュニケーションにおいて、誤解を生じる、あるいは回避する要因の分析。
4. 以上の結果を踏まえて、コミュニケーションスタイルが英語教育でどのように取り扱われるべきかの考察。

### 3. 定義

#### 3.1 Topic と topic-shift

文章や会話の中で扱われる話題は、研究者により theme や topic という用語で呼ばれてきた。会話においては、「何について語られているのか」という話題の問題は、文章における話題以上にその判断が困難となる。というのも、会話の多くの場合は、話題は会話の流れの中で様々に変化し、どこで話題が変わったかについて話し手自身もあまり意識しておらず、また、会話の方向性も定かではない場合が多いからである。Brown & Yule(1983)は、会話の中の話題について“topics are not fixed beforehand, but negotiated in the process of conversation”(1983:89)と述べ、また“there is no fixed direction for the conversation to go”(1983:84)とも述べている。したがって、会話の分析においては、その話題を「～について」と厳密に定義して区切ることは現実的ではないと述べている。むしろ、話者が先行する話題とどのように関連性を持たせて話をしているか(speaking topically)を見るほうが

有効であるとしている。そして、その関連性をもった話題のまとまりを topic framework とした。

本研究での調査対象は会話の中の話題の転換である。そのため、会話に焦点を当てた Brown & Yule の topic framework の考え方は非常に現実的で有効であると考えられる。そこで、本研究では、この topic framework の定義にのっとり、「関連性をもった発話のひとまとまり」を1つの topic framework と考え、その関連性が途切れた箇所を topic-shift が生じた箇所とみなすことにする。

### 3.2 Topic-shift のストラテジー

Reichman(1978)、メイナード(1993)は、topic-shift を行う際のストラテジーを挙げている。Reichman (1978)は以下の5つを挙げている。

1. Clue Word Shifts and Deictic Expressions  
“By the way,” “but,” “Yeah” などの表現。
2. Explicitly Labeled Shifts  
“What I was saying before,” “Speaking of X” などの話題転換を明示的に表す表現。
3. Mode of Reference  
名詞と代名詞の切り替えにより話題の焦点が変わったことを表す。
4. Repetition of Words  
話題がそれた際、元の話題の重要な語を繰り返すことで、話題が元に戻ったことを示す。
5. Tense Shift  
時制を変化させることにより、話題の転換を示す。

一方メイナード(1993)は、日本語に関して、Reichman と一部重複はみられるものの、以下の4つを挙げている。

1. 会話中の一時停止  
会話中での一時停止やポーズ。
2. まとめや評価をする表現  
先行する話題を評価したりまとめることで、その話題の終りを告げる表現。
3. 限られた反応  
先行する発話に対し、うなずきや笑いなどだけで反応し、それ以上の積極的なコメントをしない反応。
4. テーマ<sup>2</sup>展開を示唆する文副詞・接続詞  
「ところで」「話はかわりますが」などの表現。

本研究では、Brown & Yule の topic framework の定義にのっとりつつ上、Reichman とメイナードが挙げる topic-shift のストラテジーを参考にし、データの中の topic-shift が生じた箇所を判断する。

#### 4. データ

本研究では、日本語母語話者と北米（アメリカ、カナダ）の英語母語話者<sup>3</sup>との間で行われた4つの会話をデータとして利用する。そのうち2つの会話は、共通言語として英語を用いた会話で、日本語母語話者が非母語の英語で英語母語話者と話しているものである。さらに、もう2つは、日本語を共通言語とし、英語母語話者が非母語の日本語を用いて日本語母語話者と話している（表1）。会話1、3、4は、共通言語の母語話者2名、非母語話者2名の合計4名の参加者の間で行われた。会話2のみは、人数の都合で1名対1名の会話とならざるを得なかった。参加者は、この実験のために集められた初対面の者同士である。各会話は30分間で、そのテーマは、ひとまず「皆さんの異文化体験について」と設定したが、話の流れの中で変わってもかまわないことを説明した。会話は音声録音とビデオ録画を行い、それらを文字化してデータとして使用した。さらに、この会話データに加え、話し手の発話意図と聞き手の解釈を分析するために、各会話の直後に参加者に対してフォローアップインタビューを行い、それも録音してデータとして用いた。

表1 各会話の共通言語と参加者（E: 英語母語話者、J: 日本語母語話者）

参加者	共通言語が英語の会話		共通言語が日本語の会話	
	会話1	会話2	会話3	会話4
参加者	E1 E2 J1 J2	E3 J3	E4 E5 J4 J5	E6 E7 J6 J7

また、それぞれの会話参加者の詳細は下記の表2の通りである。

表2 参加者の詳細

会話	参加者	性別	年齢	詳細
会話1	E1	M	60代	アメリカ人 在日駐留米軍勤務*
	E2	M	40代	アメリカ人 在日駐留米軍勤務*
	J1	M	40代	*E1、E2ともに日本在住だが、米軍キャンプの中を生活拠点とし、日本人や日本文化と接する機会は少ない。キャンプ内ではアメリカとほぼ同じ生活を送ることが可能。日本語は簡単な単語程度。
	J2	M	40代	大学の数学の教員 英検1級 学会などで英語を使用。英語の専門書の翻訳多数。大学の体育の教員 学会などで英語を使用。アメリカの大学に短期滞在経験あり。
会話2	E3	M	50代	アメリカ人 在日駐留米軍勤務*
	J3	M	40代	*生活環境は上記E1、E2と同じ。日本語は挨拶程度。会社員 英語での会議、書類作成を日常業務とし、英語を用いた海外での仕事も多い。
会話3	E4	M	19歳	カナダ人 大学生 15歳から日本語を学習。現在も大学で日本語を学ぶ。恋人が日本人で、彼女とは日本語で話している。
	E5	M	26歳	カナダ人 会計士 19歳から大学で日本語を学習。22歳から2年間JETプログラムで日本に滞在。
	J4	M	21歳	大学生 ワーキングホリデーでカナダ滞在中。
	J5	F	22歳	大学生 ワーキングホリデーでカナダ滞在中。日本で外国語大学に在籍。
会話4	E6	M	20歳	カナダ人 大学生 高校から日本語を学習。大学でも2年間日本語を学んでいる。カナダで日本人の友人が多数おり、彼らとは日本語で話している。
	E7	F	22歳	カナダ人 大学生 高校で5年間、大学で4年間日本語を学ぶ。大学から1年間日本の大学へ留学。
	J6	F	31歳	ワーキングホリデーでカナダ滞在中
	J7	F	26歳	ワーキングホリデーでカナダ滞在中 カナダは3度目 カナダの大学のESLクラスなどで英語を学ぶ。

非母語を用いた者の言語能力に関しては、英語で話した日本語母語話者 (J1、J2、J3) は、みな日本国内で英語を学んだものの、通常の仕事で英語を用い、また、英語圏への出張などもこなし、日常会話に困らない程度の英語を話す。一方、日本語を話した英語母語話者 (E4、E5、E6、E7) は、自国の高校や大学の授業で日本語を学び、そのうち2名は1年から2年の間、日本で暮らした経験を持つ。日本に暮らした経験をもたない2人も、短期で日本を訪問し、自国では日本人の恋人や親友がおり、彼らとは日本語でコミュニケーションをとっており、普段から日本語を話す機会に恵まれている。つまり、いずれの非母語話者も、自分の意図を伝えるには困らない程度の言語能力と経験を持ち、その言語の母語話者との接触機会が多い者である。

## 5. 分析

### 5.1 英語を共通言語とする会話の分析

英語を共通言語として行われた会話1、2を分析し、topic-shiftのスタイルとその解釈がどのように話者間で異なり、その結果、どのような誤解や問題が生じているのか、あるいは、それらをどのように回避しているのかを明らかにする。

まず、各30分の会話の中で、topic-shiftを行った話者とその回数を分析した(表3)。

表3 英語を共通言語とする会話で、topic-shiftを行った話者とその回数

	Eによるtopic-shift	Jによるtopic-shift	計
会話1	9	3	12
会話2	13	3	16
計	22	6	28

その結果、会話1では12回、会話2では16回のtopic-shiftが行われていた。その内、会話1は、英語母語話者が9回行っているのに対し、日本語母語話者によるものは3回であった。一方、会話2では英語母語話者が13回であるのに対し、日本語母語話者は3回であった。両会話を合計すると、英語母語話者が22回のtopic-shiftを行っているのに対し、日本語母語話者は6回であった。つまり、いずれの会話の場合も英語母語話者が圧倒的に話題の転換を行い、日本語母語話者の割合は合計では英語母語話者の1/3にも満たなかった。

日本語母語話者のtopic-shiftが少ない原因はいくつか予想される。1つは、これらの会話の共通言語の英語は日本語母語話者にとっては母語ではなく、そのため母語で話している英語母語話者と比較して、その運用能力の不十分さが挙げられよう。英語の運用能力の不十分さから、topic-shiftを行うタイミングの認知が困難になったり、遅れたりすることが考えられる。また、たとえそのタイミングがつかめても、語彙や文法知識の不十分さのため、次のtopicを英語で即座に提示することが困難なことも想像に難くない。しかし、単に英語の運用能力の原因だけではなく、もう1つの理由として、日本語と英語とでは、好ましいtopic-shiftのスタイルが異なることも予想される。そのスタイルの違いが、topic-shiftの頻度に影響を及ぼしている可能性も検討する必要がある。

そこで、このようなtopic-shiftの回数に差が生じる原因を探るため、会話後のフォローアップインタビューから、参加者たちがどのような意図で、何に留意してtopic-shiftを行ったのかを明らかにした。まず、英語母語話者が頻繁に話題転換を行っていることについて

て、彼らにその意図を尋ねた。その答えとして E3 は「初対面なので、相手の興味に合いそうな話題を色々探そうとした。」と述べ、そのために話題を次々と変えることになったとコメントしている。実際、E3 は会話後半で頻繁に topic-shift を行っている。以下はその会話の抜粋である。

会話例 14 (// : topic-shift が生じた箇所)

99 E3: // so...so...so do you like baseball?

↓

157 E3: //so American movies, what do you Japanese like... what's your favorite uh?

↓

190 E3: //so when you were traveling in the United States you were... what fascinated you the most uh?

↓

198 E3: // how did you like American food?

↓

217 E3: so yeah, when I... I go to... see like Denny's or anything and order, I'm thinking like the steaks and meals kind of small <J3: @@@> and I have to order two just to... just to fill me up... like so... um... that's... it's yeah different, you know // so, what type of cars do you want to drive?

E3 は、発話 99 で J3 に対し、野球に関心があるかどうかをたずねている。この発話の後、2 人の間でメジャーリーグについての会話が続くが、発話 157 では映画について、発話 190 では J3 のアメリカ旅行の印象について、198 ではアメリカの食べ物について、217 では車についてと、J3 に質問をする形式で転々と新たな話題を提示している。特に、発話 190 と発話 198 の間は非常に短く、発話 190 から続く旅行の topic が十分に語りつくされていないように思えるにもかかわらず、発話 198 で料理の話題へと転換している。先述の E3 のインタビューのコメントは、このような topic-shift が意図的なものであり、J3 を会話に参加しやすくし、会話を弾ませようとする意図があったことがわかる。しかし、フォローアップインタビューによると、J3 は E3 に悪い印象を抱いていないものの、E3 の話題についていくのに必死であり、その話題転換の速さに戸惑いと疲れを見せていた。

一方、日本語母語話者たちに、積極的に topic-shift を行わなかった理由についてたずねてみた。J1 と J2 はその理由としてともに「話題を変えるのはよくないと思った。」「話題を変えたかったけど、失礼になると思った。勇気がなかった。」と返答している。つまり、日本語母語話者は、topic-shift は良くない行為であり、相手に対して失礼にあたる行為と考え、話題を変えたかったにもかかわらず、あえて変えようとしなかったことが伺える。このことより、日本語母語話者の topic-shift の回数が少なかった原因として、英語の母語話者と比較して日本人の英語運用能力が低いことだけにとどまらず、その背後に、英語母語話者とは異なる topic-shift スタイルに関する規範が見られるようである。

では、このような双方の topic-shift のスタイルの差が、相互の相手にどのような印象を与えたのか。各参加者は相手に関しての印象をフォローアップインタビューの中で以下の表 4 のようにコメントしている。

表 4 各会話参加者の相手に対する印象とコメント

		印象	コメント
会話 1	EのJに対する印象	非常に悪い	「もう一度話したいとは思わない」 「彼らは非協力的で無礼だ」 「もしアメリカにいたならば、彼らとは話さないだろう」 「彼らの話し方はアメリカでは問題だ」
	JのEに対する印象	良い	「(会話ができて)楽しかった」
会話 2	EのJに対する印象	良い	特に無し
	JのEに対する印象	良い	「話題の転換が早くてついていけない」

会話 1 では、日本語母語話者は英語母語話者に対し悪い印象を持っていないのに対し、英語母語話者は日本語母語話者に対し、「もう一度話したいとは思わない」という非常に悪い印象を抱いていた。その原因として、日本語母語話者が会話に協力的ではなく、会話に参加していないという印象を受けたためであった。会話 1 では、英語母語話者は話題を提供するだけでなく、その話題に関して主として話しをしていたのに対し、日本語母語話者はそれに対してうなずき、コメントをし、笑い、時々質問するものの、ほとんど自ら進んでは話題を提供しようとはしなかった。このように、相手の話題に合わせ相手に話をさせ、自ら話題を転換したり提供したりしない日本語母語話者のスタイルは、英語母語話者には「非協力的」で「失礼」な態度と解釈されている。しかし、日本語母語話者はそのことには気付いておらず、この会話を「楽しかった」と述べ、英語母語話者に対し悪い印象は持っていなかった。この会話でのコミュニケーションは、英語の語彙や文法の問題は少なく、双方とも相手の話していることをほぼ理解できており、情報の伝達という点では成功していた。しかし、聞き手と良い対人関係を築くという点では失敗に終わった例といえよう。

このようなミスコミュニケーションの原因として、フォローアップインタビューからも明らかのように、英語母語話者と日本語母語話者が持つ topic-shift に関する規範の違いが挙げられる。英語母語話者は共通の話題を探すために積極的に topic-shift を行い、会話に協力的であることが望ましいコミュニケーションスタイルと考えている。それに対し、日本語母語話者は、自分からの topic-shift は相手に対しての失礼になる可能性があると考え、積極的に topic-shift を行うことは必ずしも望ましくはないと考えている。言い換えれば、英語母語話者は、会話を盛り上げるために参加者が共同で行うべき作業として topic-shift をみなしているのに対し、日本語母語話者はあくまでも相手の話題を優先しながら topic-shift を行おうとする、あるいはそのためには自分は topic-shift は控えようとするスタイルを重視していると考えられる。つまり、英語母語話者は共同作業型 topic-shift であるのに対し、日本語母語話者は相手優先型 topic-shift といえよう。

このような両話者のスタイルの相違は、topic-shift のストラテジーの相違としても現れている。表 5 は、先述した Reichman とメイナードのストラテジーを参考に、会話 1 と 2 で、英語母語話者と日本語母語話者がどのように topic-shift を行ったかを分類し、その回数を集計したものである。

表 5 会話 1、2 の topic-shift のストラテジー (回)

	口火	ポーズ	評価	まとめ	限られた反応	その他	計
英語母語話者	2	9	4	3	1	3	22
日本語母語話者	0	2	0	0	1	3	6

共通する際立った特徴としては、両言語話者とも、ポーズの後に topic-shift を行うことが多いという点である (E は 9 回、J は 2 回)。これは、ポーズが会話の流れの中での沈黙の時間であり、先行する話題に関してはや話すべきことがない、あるいは、話す人がいないという明確なしるしになるからである。そのため、両言語話者とも先行する話題を中断してしまう可能性を心配せずに、安全に新しい話題を提供できる場であると判断するからである。

一方、両言語話者の大きな違いとしては、2つの会話の口火を切ったのはいずれも英語母語話者である点である。また、それ以外にも、彼らは先行する話題を評価したりまとめたりする発話の後に機会を捉えてすばやく次の話題を提供している (評価: E は 4 回、J は 0 回、まとめ: E は 3 回、J は 0 回)。以下は、E3 が先行する話題を自らまとめ、その後すぐに新たな話題を提供している例である。

会話例 2 (//: topic-shift が生じた箇所 →: 注目箇所)

- 213 A3: yeah small size, so uh everytime my Japanese friends would come over... now them out they'd always have to take a doggy bag and take it back to and take back but they're always amazed how much food...uh they get
- 214 J 3: even in the fast food restaurant like McDonald's, the size is different
- 215 A3: right
- 216 J 3: in Japan
- 217 A3: so yeah, when I...I go to...see like Denny's or anything and order, I'm thinking like the steaks and meals kind of small <J3: @@@ > and I have to order two just to...just to fill me up...like so...um...that...it's yeah different,
- you know // so, what type of cars do you want to drive?
- 218 J 3: excuse me?
- 219 A3: cars, what type of cars do you want to drive? automobiles
- 220 J 3: oh my ... my car is Toyota
- 221 A3: uh-huh
- 222 J 3: it's ... it's very compact car

この場面では、はじめ2人は日本とアメリカのレストランの料理の量の違いについて話している。この話題は発話 198 から始まり (紙面の関係上省略)、しばらくの間はこの話題で盛り上がっている。しかし、A3 は発話 217 で “it's yeah different, you know” と述べることで、両国に違いがあるというこれまでの話題をまとめている。その上で、それを受けて、すかさず自ら新しい topic、つまり車の話題へと転換している。この E3 の全くポーズをおかない topic-shift は、J3 にはかなり唐突であったため、J3 は料理の話題が打ち切られ車の話題に変わったことがすぐさまには理解できず、発話 218 で “excuse me?” と聞き直しを行っている。このようなポーズを置かない topic-shift は日本語母語話者には馴染みにくく理解しづらいようである。

それに対し、日本語母語話者は topic-shift の回数が総数で 6 回と少ないため、ポーズの後に見られる topic-shift 以外は目立った傾向はつかみにくい。

以上の結果より、両言語話者のあいだには topic-shift の行い方、また、その背後にある望ましい topic-shift スタイルに対する考え方にかかなりの違いがあることが明らかとなっ

た。しかし、このデータの共通言語は英語であり、日本語母語話者にとっては非母語での会話である。そのため、その結果を母語で話している英語母語話者と同等に比較することは必ずしも公平ではない。そこで次に、英語母語話者と日本語母語話者の間で日本語を共通言語とした会話を分析することで、両言語話者の特徴をより明確にしたい。

## 5.2 日本語を共通言語とする会話の分析

会話3、4では、英語母語話者と日本語母語話者が日本語で会話を行った。それぞれ30分の2つの会話の中の topic-shift の回数を言語母語話者ごとにまとめたものが次の表6である。

表6 日本語を共通言語とする会話で、topic-shift を行った話者とその回数

	Eによるtopic-shift	Jによるtopic-shift	計
会話3	8	6	14
会話4	8	10	18
計	16	16	32

2つの会話の合計を見ると、英語母語話者も日本語母語話者もそれぞれ16回と、同じ回数の topic-shift を行っている。英語での会話(表3)と比較すると、本データでは日本語母語話者が頻繁に topic-shift を行っていることがわかる。しかし、一方で、英語母語話者が、非母語での会話でも日本語母語話者と同じだけ topic-shift を行っている点は注目すべきである。これは、日本語母語話者が同じ条件の非母語で行った会話1、2の topic-shift の少なさとは大きく異なる点である。

英語母語話者が日本語会話で行う topic-shift の例として、次の会話を見てみよう。

会話例3 (//: topic-shift が生じた箇所 →: 注目箇所)

- 30 E6: 私も、た、や、すべての人生で、ここで、no、生まれて育ちました  
 31 J6,J7: う、はは、はい  
 32 E6: { それ  
 33 J6: { 海外旅行とか行ったことはない?  
 34 E6: yeah, あ、ただ、えっと、アメリカで1年間に住んでいますが、は、後、ちゅうごくの、oh、いや、中学の時なんだけど、は、(pause) ちょっと、んー、  
 { 後は何も無いよ、@@@。〜〜〜がいいかな  
 35 J7: { んふ @@@ (pause)  
 →36 E7: // で、大谷さんのようなお経験をしたことがありますか? レストランで働いてるし、何か、お客様が失礼ですかとか、日本に比べて  
 37 J7: レストランで働いてて思ったのが、あの、お客さんのマナーはいいなと、おふ@@、日本人の食べてるところから、それよりもは、なんかこっちの人はマナーがいいなっていうのを感じました。やっ、みんな優しいです@@@

この場面では、発話35までE6が自分の経歴について話し、それに関してJ6、J7があいづちや質問をしている。発話35の後にポーズがあり、それをきっかけにE7が発話36で、

「で、大谷さんのようなお経験をされたことがありますか？」と質問の形式で新しい話題を持ち出している。筆者はこの実験の直前に、参加者たちを和ませるための雑談をし、その中で自らが海外で経験した面白い体験を話していた。E7はその話を受けて「大谷さんのようなお経験」と例を挙げて、J6とJ7のカナダでの体験について topic を転換している。このように、E7は、自らの母語ではない日本語での会話において積極的に topic-shift を行い、会話に貢献しようとしてつとめている。このスタイルは、会話1、2での非母語による会話という同じ条件での日本語母語話者たちの topic-shift の行い方とは大きく異なる。

さらに、フォローアップインタビューでは相手に対する印象をたずねた(表7)。その結果、これらの会話3、4は先述の会話1、2とは異なり、日本語、英語母語話者ともに会話を楽しみ、相手に対する印象も良いものであった。両者とも会話を「楽しかった」、「相手の印象は悪くない」、「話せてよかった」とコメントしている。また、topic-shift を行う理由について、日本語、英語母語話者はそれぞれ以下のように述べている。

表7 各会話参加者の相手に対する印象とコメント

		印象	コメント
会話3	EのJに対する印象	良い	「ポーズはよくない。ポーズが生じるとresponsibilityを感じ話題を提供した。」 “I tried to feed the conversation.”
	JのEに対する印象	良い	「詰問みたいになるので、ちょっと(相手の人から話題が出るのを)待った。」
会話4	EのJに対する印象	良い	「何か話さなくてはいけないと思う。」 「他の人が話すのを待とうとは思わなかった。」
	JのEに対する印象	良い	「英語圏の人は沈黙が続くと相手が退屈しているサインだと知っているの、話さなくてはと思った。日本人なら沈黙は気にしない。お茶とか飲んだりするし。英語圏のときほど気にしない。」

英語母語話者はポーズを肯定的には解釈せず、ポーズが生じると何かを話さなくてはならないと責任を感じている。また、“I tried to feed the conversation.”と自ら進んで話す必要性を感じている。一方で、日本語母語話者は、「詰問みたいになるので、ちょっと(相手の人から話題が出るのを)待った。」、「日本人なら沈黙は気にしない。お茶とか飲んだりするし。英語圏のときほど気にしない。」という発言からわかるように、ポーズについて英語母語話者のような否定的な評価を行っていない。それどころか、相手に話題を出させるためにあえて待とうとしていることが明らかになった。つまり、この日本語での会話でも、会話に貢献するためにポーズを避け、自ら話題を出そうとする英語母語話者のスタイルと、相手に話させるためにポーズをとり、自ら進んで topic-shift をしようとはしない日本語母語話者のスタイルが見られ、その結果は先の英語での会話1、2に見られたものと一致する。つまり、会話1、2での日本語母語話者の topic-shift の少なさは、単に非母語である英語の語彙や文法などの言語構造の知識の不足から生じるものというよりは、母語である日本語の topic-shift のスタイルが大いに影響していると考えられる。また、英語母語話者に関しては、会話3、4の非母語での会話で積極的に topic-shift を行うスタイルは、母語の英語でのスタイルに准じた結果と考えられる。

## 6. 考察

以上の分析結果より、日本語と英語の母語話者では、異文化間のコミュニケーションに

において、その topic-shift の頻度やストラテジーが異なることが明らかになった。さらに、その要因として、それぞれの言語文化で期待される望ましい topic-shift の方法に相違があること、また、各自の言語文化での方法を母語以外の言語での会話にも援用していることが指摘できた。

しかし、異文化間コミュニケーションにおいて問題となる点は、そのスタイルの違いが、異なる言語文化を持つ相手にどのように解釈されているのかという点である。そして、その結果、コミュニケーションを通じて良い対人関係を築くことに成功しているのか否かという点である。会話1では、英語母語話者は日本語母語話者のコミュニケーションスタイルを「失礼」で「非協力的」と解釈し、「話したくない」と感じている。これはコミュニケーションを通じた対人関係の構築という点では、明らかに失敗といえよう。一方、会話2、3、4は、日・英語の母語話者間にコミュニケーションスタイルの相違が見られるにもかかわらず、相手に良い印象を与え、また会話を楽しんだことが明らかになった。その点では、この3つの会話は成功といえよう。話者間でコミュニケーションスタイルが異なってもミスコミュニケーションを生じない会話（会話2、3、4）とミスコミュニケーションを生んでしまう会話（会話1）とでは、果たして何が異なるのであろうか。会話1のような事態を引き起こさないためには、どのような点が留意されるべきなのか。

フォローアップインタビューの結果によると、会話1の英語母語話者は、日本語母語話者が英語の topic-shift のスタイルをとらなかつたことに不快感を示している。会話1のE1はそのインタビューで、J1、J2の話し方を「彼らの話し方はアメリカでは問題だ」と述べ、「もしアメリカにいたならば、彼らとは話さないだろう」と断言している。このことより、彼があくまでもアメリカ英語を基準に日本語母語話者のスタイルを評価していることがわかる。

一方、これとは全く反対の態度を取っているのが会話4のJ7である。彼女は「英語圏の人は沈黙が続くと相手が退屈しているサインだと知っているのだから、話さなくてはと思った。日本人なら沈黙は気にしない。お茶とか飲んだりするし。英語圏のときほど気にしない。」と述べている。つまり彼女は自分の母語である日本語を共通言語としているときですら、話し相手の言語のコミュニケーションスタイル、つまり、英語では沈黙が退屈のサインとなる可能性があるという点に配慮している。その上で、普段の日本語のスタイル、つまり沈黙を気にせずお茶を飲んだりするスタイル、から英語のスタイルにあゆみ寄ることで相手とのミスコミュニケーションを避けようとしていることがわかる。このような配慮が、相手へ好印象を与える1つの要因となり、結果的に、友好的な対人関係を築くコミュニケーションへとつながったと考えられる。

このことは、文法や語彙の知識だけでは、必ずしも相手との友好的な関係に配慮した円滑なコミュニケーションが取れないことを示している。会話1の参加者に関しては、E1、E2に英語の能力が備わっているのはもちろんのこと、日本語母語話者も普段から国際学会や翻訳の仕事などで英語を使用し、英語による情報伝達能力は十分に持っていた。しかし、英語の topic-shift のスタイルを知らないがために、聞き手と良い関係を築くことに失敗している。さらに、会話1の場合、英語母語話者側にも、自分のものとは異なる多様なコミュニケーションスタイルを受け入れる寛容さが無いことは上記のフォローアップインタビューの結果より明白である。これは、会話4のJ7が、相手の言語（英語）のスタイルに関しての知識をもっており、そのスタイルに自分からあゆみ寄ろうとした寛容さとは大きく異なるところである。

この結果は、異文化間でのコミュニケーションで聞き手との誤解のない対人関係を築こうとすれば、異なるコミュニケーションスタイルに関する知識と、またその違いを受け入れあゆみ寄る寛容さが必要不可欠であることを示している。そしてそれは、共通言語の非母語話者側にだけでなく、共通言語を母語とする者にも不可欠なのである。異文化間のコミュニケーションは共通言語の母語話者と非母語話者の双方が互いの文化を認めた上でのあゆみ寄りが重要で、それらは決して非母語話者にのみ求められるものではないことが明らかとなった。

## 7. 英語教育への示唆

以上の結果をふまえ、異文化間のコミュニケーションで相手と良い対人関係を築くことが出来る人間を育てるためには、我々は今後どのような英語教育を目指すべきなのであるうか。

本調査では、日本語母語話者と英語母語話者の間の会話をデータとして用いたが、これからの時代、日本人が英語でコミュニケーションをとる相手は必ずしも英語母語話者だけとは限らない。多様な言語文化を背景とする人々と英語を共通言語としてコミュニケーションをとり、かつ、誤解のない関係を築いてゆく必要がある。また、日本国内においても様々な国からの滞在者が増え、多様な価値観を持った人々と日本語でコミュニケーションをとる必要性も高まっている。その現実を踏まえると、我々が英語教育を通じて学生に伝えなくてはならないことは、単に英語のコミュニケーションスタイルのあり方だけにはとどまらないはずである。この世界に、日本語とも英語とも異なる多様なコミュニケーションの取り方があり、また、その背後に我々のものとは異なる価値観があるということを教え、体験させることが必須である。たとえ情報を正確に伝達するだけの英語会話の能力を持っていたとしても、会話1の英語母語話者のような自らのコミュニケーションスタイルとその価値観しか認められないような偏狭な視野を持った人間を育てたのでは、日本の英語教育は失敗であろう。また、日本語の会話であっても、日本語のものとは違うコミュニケーションスタイルを受け入れることが出来る人間を育てることが重要であろう。

そのためには、英語教育での習得事項の中で、語彙や文法事項と並んでコミュニケーションスタイルの学習が重視されるべきであろう。しかも、それは英語のスタイルだけではなく、多様なスタイルであるべきである。日本の英語教育の現場に「異文化理解」、「異文化間コミュニケーション」、「多文化共生」という題目は広く行き渡っている。しかし、現実には、学習者に何をどのように教えるのか、異文化や多様な文化をどのように理解させるのかという点に関しては非常にあいまいなままである。コミュニケーションスタイルの多様性についての学習は、文化の多様性を理解させ、その違いを柔軟に認め、受け入れられる人間を育てる上では非常に有効であり、また不可欠であるといえよう。

文部科学省の『「英語が使える日本人」の育成のための戦略構想』(2002)や『「英語が使える日本人」の育成のための行動計画』(2003)などでは、コミュニケーション重視の傾向が以前にもまして強調され、「実践的コミュニケーション」や「仕事で英語が使える日本人」を強調している。しかし、日常会話もビジネスの場での会話も、その基本は人間対人間の関係である。その関係に誤解が生じたのではビジネスも日常的コミュニケーションも成立は難しい。英語コミュニケーションを、単なる情報の伝達的手段から、対人関係の構築・維持のための手段と考えれば、多様なコミュニケーションスタイルの学習とそれに対する寛容の姿勢の育成は避けて通れない課題である。

## 8. 今後の課題

本調査は、4つの会話データの分析に基づいている。コミュニケーションスタイルの詳細な分析のためには、今後、より多くのデータの分析を必要とする。さらに、「北米」と大きくくくった英語母語話者のデータも、国籍、性別、年齢などによりその特徴をより詳細に分析してゆく必要がある。それは今後の残された課題である。

さらに、教育現場で具体的にどの段階でどのようにコミュニケーションスタイルの多様性を教えることが効果的なのかというカリキュラム作成の問題、また現在の現場の教師にそれが可能であるのかという教員の資質や教員育成の問題も、今後具体的に考えてゆく必要がある。

## 注

本稿の調査の一部は、『平成15年～16年度科学研究費補助金研究基盤研究(C) 課題番号11520379「日本人が話す英語に見られる対人関係構築・維持上の問題点の解明」研究代表者堀素子(関西外国語大学)の研究の一環として行ったものである。

1. これらの機能に関しては、用語は異なるものの、他にも Malinowski (1923)、Jakobson(1960)ら多くの研究者によって言及されている。
2. メイナードは「トピック」ではなく「テーマ」という用語を用いている。
3. 以下で「英語母語話者」という場合は、北米の英語母語話者を指すこととする。
4. 会話の文字化記号については以下の通り。

//	Topic-shift が生じた箇所	→	注目箇所
?	上昇のイントネーション	～～	聞き取り不明な箇所
...	いいよども	(pause)	ポーズ
@@	笑い	< >	笑いやあいづちの重なり
[	発話の重なり		

## 参考文献

- Brown, G. & Yule, G. (1983). *Discourse analysis*. Cambridge: Cambridge U.P.
- Clyne, M. (1994). *Inter-cultural communication at work: Cultural values in discourse*. Cambridge: Cambridge U.P.
- FitzGerald, H. (2003). *How different are we?: Spoken discourse in intercultural communication*. Clevedon: Multilingual Matters LTD.
- Jakobson, R. (1960). Linguistics and poetics. In T. A. Sebeok (ed.), *Style in language*. Cambridge: The Technology Press of MIT.
- 近藤彩. (2004). 「会議におけるトピック展開についての研究—非母語話者に「非効率」と思わせる要因—」『日本語教育国際研究大会予稿集』267-272
- Malinowski, B. (1923). The problem of the meaning in primitive languages. In C. K. Ogden & I. A. Richards (eds.), *The meaning of meaning*. London: Kegan Paul. (Reprinted in his *Magic, science and religion and other essays*. Glencoe: Free Press, 1948.)
- メイナード・泉子・K. (1993). 『会話分析』東京：くろしお出版
- 文部科学省. (2002). 『「英語が使える日本人」の育成のための戦略構想』[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/020/sesaku/020702.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/020/sesaku/020702.htm) (2007.5.13 アクセス)
- 文部科学省. (2003). 『「英語が使える日本人」の育成のための行動計画』[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/15/03/030318a.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/15/03/030318a.htm) (2007.5.13 アクセス)
- 村田和代・大谷麻美. (2006). 「ポジティブ・プライトネス・ストラテジーの指導の試み」堀素子他著『プライトネスと英語教育—一言語使用における対人関係の機能—』東京：ひつじ書房
- Reichman, R. (1978). Conversational coherency. *Cognitive science*, 2, 283-327.

- 重光由加・大谷麻美.(2003).「英語談話に見られる Face、FTA の特徴：日本人による英語会話の成功例と失敗例」第42回大学英語教育学会全国大会シンポジウム『Faceの普遍性と文化によるFTAの多様性』
- Tannen, D. (1984). *Conversational style: Analyzing talk among friends*. Norwood, NJ: Ablex.
- 津田早苗.(2007).「国際英語の視点を授業に 第5回 スピーキングの教育に国際英語の視点を入れる」『英語教育』5月号 64-65
- Yamada, H. (1997). *Different games different rules: Why Americans and Japanese misunderstand each other*. New York: Oxford U.P.
- Yang, H. (2005). A review of topic shifting research: Focusing on the types and strategies. In *Japanese language education: The state of the art in second language acquisition and instruction research*. Tokyo: The society for research on Japanese language and culture, 161-185.
- Wierzbicka, A. (1991). *Cross-cultural pragmatics. The semantics of social interaction*. Berlin: Mouton De Gruyter.